第二章　明治に於ける京大教授時代(下)

一、此時代の博士の公生活

大學教授の任務

大學教授の任務は、國家に須要なる學術の理論、及び應用を教授し、並びに其の蘊奥を研究するにある。(イ) されば其の公生活はそれ自身學術的生活を意味するものたるは謂はずして明かであるが、前章に於いて博士の純研究的方面を錄した編者は、本章に於いては他の一面卽ち博士の大學に於ける事務的及び社會的方面の活動を主として誌することゝする。

編者の所謂公生活の意味

故にいま茲に謂ふところの公生活とは、專ら此の方面に限つた狹義の意味であつて、前章に蒐錄し得ざりし部分を總括する爲に用ひた命題に過ぎない。編者は大正時代の博士を叙するに當つても、また便宜上これと同樣の記述法に據るであらう。

兩陛下行幸啓の御說明

博士は京都帝國大學教授に任官後四年卽ち明治三十六年五月には　天皇皇后兩陛下の大阪に於ける勸業博覽會行啓の儀があつた。卽ち其の月の一日には　天皇陛下、二日には　皇后陛下の御觀覽仰出されたので、博士は兩日ともに通運館の

出品に附き御説明を申上げた。又八日は皇后陛下の京都帝國大學行啓の御當日であつたが、學内の各所を一々御覽を願ふ事は出來難いので、大講堂内に各部の學術品及び標本類を集めて台覽に供し奉つた。博士の此の日の擔任は、土木工學に關するものとして出陳した燈臺、閘門、橋梁等の模型と大日山上に据付けた回照器に就き、之が視方と測器の取扱ひ等に就いての御説明を申上げることであつた。

博士の第一回奬學資金の寄附

大學に對しては、これよりさき博士は奬學資金の寄附を行つた。それは明治三十四年十二月で、博士は北海道鐵道會社より其の創立に除し盡力せし故を以つて報酬金を贈られたのを、直ちに大學に寄附したのである。寄附は公債證書額面壹千壹百圓であるが、之を大學創立壹百年まで利殖の後、其の期に及んで適當に使用せられんことを條件とした。百年まで利殖すれば、二十萬圓に達する筈であるから、可成有效に用ひられよう。少額の金にても其の方法さへ講ずれば、國家社會のために相當の貢献はなし得るといふ博士が平素の用意は其の一端をこゝに瞥見せしめられるのである。なほ大學に對する寄附としては、前章に傳へし鐵道研究用助手の雇用費もある。其の他に學術上のものでは、明治二十八年一月十七日京都府立圖書館に、博士が先年渡米の際手に入れたペルリの浦賀來着當時の大圖Cross-

博士平生の用意を窺ふ

京都府立圖書館への寄贈圖

ing the Rubicon と題する頗る珍らしいものを寄附した。後、大正六年十二月にペルリ一行中の生存水兵ハーデー老人の來朝のとき、老人は親しく此の圖幅に署名し、現に同圖書館の貴賓室に掲げられて居るのである。

博士の表彰

明治三十五年四月九日に、博士は American Railway Engineering Association に入會、三十六年二月五日第五回內國勸業博覽會審査官を仰せつけられた、而して周到綿密、職責を盡し其の勞尠なからずとて、其の年末には銀杯一箇下賜せられた。なほ同年十一月二十日京都市參事會では、琵琶湖疏水工事に水力電氣事業を設備せし功績記念のため、當時、竣成せし新築の水利事務所內に、博士と高木文平氏との寫眞を掲げることを決議した。

學術實業懇話會の組織

明治三十七年には四月六日、京都法科大學教授仁保龜松博士とゝもに發企人となつて、學術實業懇話會を組織した。これは博士が京都市の繁榮を期する基礎的の須要事として在京都の學者と實業家との接近聯絡を圖つたものである。現在市に存する京都經濟會は其の後身であつて會は博士等發企人の所期に違はず效果を擧げ、年一年盛大となりつゝある。なほ博士は十月四日を以つて Member of the American Society of Civil Engineer となり而して日露戰役に關し、戰地の輸送狀況視察

を行うたのも、また此の年の秋のことである。

大學自治問題勃發す

斯くして博士は、平靜なる公生活を續け來れるうち、明治四十年を以つて所謂大學自治問題の勃發に會した。事端は此の年十月十七日、岡田良平氏の大學總長に任ぜられしに發し、學内にては政府の處置に尠からざる反感を生じ、次いで翌四十一年七月、岡田總長が現職のまゝ文部次官を兼官するや、其の反感は極度に達した。

大學總長の椅子を文部高官の腰掛に

如何なる場合にも公正の態度を失はざる博士は、大學總長の椅子を文部高官の腰掛にされてはならぬ、大學存立の大義のために、(2)政府の反省を促すべく意を決して、同志の諸教授と共に起つた、政府も中々頑固であつたが博士等の決心堅固であつて終に岡田氏辭任、菊池大麓博士の新總長となるに及んで紛擾は納り、問題はこゝに解決を告げた。時は此の年の九月初旬である。

皇儲殿下の大學行啓

明治四十三年十月一日、皇儲殿下の大學台臨を迎へ奉りて、博士は工科大學教室の御案内を承り、なほ明治四十五年四月十五日は第二琵琶湖疏水路へ初めて通水せる日、又同年六月十五、十六兩日は京都市三大事業竣工式及び祝賀會の催されたる日として、ともに博士のために忘るべからざる記念の日であらねばならぬ。

博士の記念すべき日

斯くして博士の公生活は、我が明治年代に於ける國運の隆昌に伴ひ、博士の學術的

生活は日本文明の進展に並行して、我が國家社會に多くの寄與をなしつゝ、大正時代に入つたのである。

(1)大正七年十二月五日、勅令第三百八十八號大學令第一條參照。

(2)當時政府に交渉のため東上した委員は、村岡(理)千賀(法)中西(醫)三教授、並びに田邊博士工)であつた。博士は即ち千賀教授と共に先づ山縣樞密院議長を訪ひ、次いで桂總理大臣を訪ひ、事理を充分に說明して其の了解を得て置いて更に强硬に小松文相に迫つた。それは明治四十一年の七月末より八月初旬にかけてのことであつた。大正二年にも澤柳總長のとき一と騷動が擧つた、此の時は海外旅行中の出來事であつたため博士は奔走盡力されて居らぬ。

二、多祥なりし當年の私生活

平和多祥であつた

博士の家庭は明治二十三年、天長節の佳辰を卜し、北垣國道氏の長女靜子の君を迎へ、華燭の典を擧げてより、爾來二十有餘年、極めて平和に又極めて多祥であつた。襁褓のうちより父なき博士を扶育して、家門を支持せられし母堂ふき子刀自の、明治二十六年に逝去せるは、人世の悲痛事たるに相違なきも、享年六十一、刀自は此の

時、既に博士が當代の偉業を完成して、其の名聲學界に藉甚たるを見、多年の艱苦の報はれしに滿足して永眠せるを思へば、博士たるものまた愁腸を醫するに足るであらう。況んや其の前年の一月に嗣息秀雄氏生誕、博士の明治時代を終るに當つては氏の年齢既に二十に達せり。後、相次いで出生せる三子は盡く男。なほ明治三十六年一月十三日には始めて玉の如き女子を擧げ、とし子と命名して其の成長を樂しみつゝあるをや。博士の私生活は幼少より青年時代の數奇なりしに反し、年を逐うて宛ら滋雨の至るごとに、滿地春をなすの生々たる觀を呈した。

石菴先生五十年祭事執行

三、石菴先生五十年祭典

明治四十年一月七日、博士は祖父石菴先生の五十年祭典を擧行した。此の祭事には故先生の門下生と、幕府時代の聖堂に於ける授業者とを招待したのであるが、多く故人となつて式に列せる者の多からざりしは元より怪しむに足らぬ。寧ろ參會者の小數なりしだけ、一層其の擧をして敦厚親睦の情趣を增さしめ、舊を談じて興會轉た盡きざるものがあつた。卽ち其の時の參列者の氏名は、

南摩綱紀(八五)重野安繹(八二)成瀨夫人(八一)三輪甫一(七七)吉川辰夫(七六)榎本武揚(七二)宮本小

一(七二)荒井郁之助(七二)石川治平(六六)富田冬三(六六)岩崎亮之輔(六四)乙骨太郎乙(六三)尺秀三郎(振八相續人)吉田彌平(賢甫相續人)塚本明籌(桓甫相續人)

なほ故先生の舊知眞中氏は既に死去し、其嗣息は支障ありて來會せなかつた。當日の參會者中、最年長者たる南摩氏の賦奠に曰く

南摩氏の賦奠

石菴先生五十年祭賦奠

先生德川幕府臣勺中故及

王政覇權多變遷。洋々皇德八紘宣。招魂欲告黃泉遠。春雨昏風五十年

と、明治の聖代に當り愛孫を祭主として此の式典の擧行されたる、先生以つて瞑すべしであらう。

先生以つて瞑すべし

四、蓮舟翁の金婚式を擧ぐ

博士の最も親近せる叔父蓮舟翁

幼にして父を失ひたる博士のためには、叔父たる蓮舟田邊太一氏こそ最も信頼し、最も親炙する近親の筆頭であつた。氏もまた博士を子の如く愛撫したものであるが、不幸にして氏は、其の中道に蹉跌してまた振はず。これがため博士は如何にもして、其の晩年を飾るべく苦慮せざるを得なかつた。明治四十五年は太一氏夫

翁の爲に金婚式を擧ぐ

妻の結婚後五十年に相當する。博士はこれを機として盛大なる金婚式を擧行し、蓮舟翁の健在を社會的に知らしめて、其の老を慰め以つて撫育の恩の一端に酬ゆるに決した。其の費用を負擔する如きは、博士の顧みるところではないのである。即ち當日の招待狀に曰く

拜啓、時下淸和之候、益々御健勝被爲在恐悅奉存候陳者、叔父太一結婚後本年にて五十年に相成候に付、來五月二十六日、芝山內紅葉館に於て、金婚の祝莚相開可申候間、平素御厚情不被爲捨、同日午後五時より御屆臨被成下候はゞ、光榮の至りに奉存候、右御案內申上度如此候。頓首。

明治四十五年五月十六日、田邊朔郎。

當日張宴の次第

明治四十五年五月二十六日、紅葉館にて擧行せられし此の祝宴は、主催者たる博士の挨拶に始まり土方氏の答辭終るや、酒三行にして絃聲湧き、歌妓の舞踊に滿堂春めきわたるのであつた。即ち謹嚴の菊池博士先づ杯を擧げ、酒脫の末松博士座を起つて博士に迫るに其の自作「民草」の彈奏を以つてし、一座の紅裙これに應じて、博士の演技を慫慂して止まず、蓮舟夫妻また不遇の身の、老を忘れて拍手しつゝ、これを迎ふる光景。げにそれは泪せらるゝばかり懷しき情景でないか。蓮舟遺稿の中に金婚式當時に賦せし翁の七言律詩を收む、詩にいふ。

寄　内

奉帚殷勤五十秋。量鹽數米儘分憂。偶偷餘暇操彤管。能守長貧到白頭。入世眉無憑我畫。游山酒每向卿謀。肯堂肯構孫兒在。俱喜從今百不愁

當日の次第は、雪嶺博士の室三宅花圃女史の麗筆によりて明治四十五年七月發行の婦人畫報「其日其日」の題下に、左の如く記述せられて居る。女史は蓮舟翁の息女で博士とは甥姪の關係にある。女史の文章の中、博士を呼ぶに心易く「朔郎さん」の名を以つてせり。此の詩、此の文、兩家平生の親密と、當日田邊氏一族の愉悅を語つて餘りあるものである。次ぎに其の全文を掲げて、當日交驩の狀を偲ぶであらう。

洋々たる青海原にも女波男波はリズムを爲して寄せかへす、人は七轉び八起きといふが、いつも磯山松の常磐ではゐられぬが定である、つぎからつぎとよい事なりわるい事なりに追はれて行く内に進歩する人も退歩する人もあるのであらう。事の變化、時の推移といふうちにふくまれてゐる事件はみんなの試金石になる。其中にも女の身の一大變化は結婚であらう。昨日の他人今日の夫、一日二日の新婚旅行に、もはや世の中のたつた一人の親密なものとなつてしまう。而して共に笑ひ共に泣き苦樂相頒ち、歎苦に慰藉し合うて、十年二十年三十年四五十年の星霜も經てきたのちは夢のやうに茫乎として、たゞ二人の間にいよ〳〵固い絆

計りを見出すので、あらう。〔中略〕

金婚式は生家の兩親が結婚後、今年で五十年、ちようどそれに當るといふので田邊の本家の朔郎さんが去年から私が是非お祝ひを致しませうと言つておられた。

時は文久二年四月の二十四日、母は荒井清兵衛といへば其頃名代官として甲斐の國市川に大明神とまで祭られた程仁政を敷いた人の次女として嫁入をせられたのであつた。荒井の長兄は、郁之助として後に幕府の海軍奉行として、故榎本さん、故大鳥さんと共に箱館の戰爭にも武名を唱はれた方であれば、その頃とても、新進の學問に時の大勢を察して早くより蘭書などの方も暗くなかつた。父上は其友として始終この荒井の家にも出入して居られて母上の十一歳の頃から知つて居られたこと故かゝる相談も極く容易に整つた。〔中略〕

維新の時、天朝の錄を食むを屑しとせずしておられた父上が德川氏の駿河に移封されて沼津に兵學校を創立せられし時召されて、教授に任ぜられた。〔中略〕

それこれしてゐるうちに、世も定まつて東京に立ち歸り、外務省に出仕されるやうになつた。天朝から父を迎への御使は沼津へ幾度も來たさうで、父も遂に草廬を出でられた。

其後は下谷から一番町の邸、父上は花柳社會から御前樣といはれて時めき派手に暮して居られたが、外面のいろ〳〵の困難は世の中と共に安靜になつても、母上の心の中の波風いはよ〳〵荒くなつた。其頃は人氣も立つてゐたし、すべて品行といふ事に重きをおかなかつた、

男の働き位にしてゐた時であれば、また下に仕はれてゐる人達も、今の官吏などゝちがひ、ごく親密の代りに誠によくない事までも相手として始終取卷いてゐる。

幼い私の家の狀は、藝人とか、藝者とかいふものが、一番出入をしげくしてゐたやうに思ふ。他になんにもおぼえてゐる事はない。幼い時の事はかういふ事が一番多く記憶に殘つてゐる外妾などゝいふ今おもふと實に情けない者もゐた其中で、温順な質素なまじめな母上は何時も〳〵かはらず針箱の前へちやんと坐して居られた。

冷靜な態度で辛棒をつゞけておられる母上は、ごこまでも消極的に家を守つて居られる。父上は私と兄上とたつた二人の子の事も忘れてお仕舞になつたともおもはれる程、他人の爲に欺かれたり、利用されたり、遂には莫大の借財もなされた、世にめづらしい才氣を持つて生れた兄上は滿二十歲を一期として英國にて死去せられて後、いよ〳〵家の樣は難かしくなつてきた。其中を母上は靜寂に家政を處理して、ごにかくに今日まで荒ぶる波風を凌いでこられたのであつた。

一人子になつた私は、女子の事、養子に人物なしとて嫁入をする。殘る兩親は居かぬながら御扶養申上る事とした。

本家の田邊の方は父上の兄上が夙く死去せられて二人の御子があつた。一人は鑑子さん、今の內匠頭、片山東熊さんの御內室、弟の方は朔郎さん、京都大學の教授、琵琶湖疏水で名高い人

である。

子に緣のない父上も、かういふ御人達を子同樣にして成長し、かく成功するのを見ることゞけられたのは、この位御嬉しいかしれぬ。

この度の金婚式もこの朔郎さんの萬事御盡力、鑑子さん御夫婦の御配慮から成立つた。

當日は五月二十六日、紅葉館で開かれた。舊い御馴染計りといふので、無論これは昔からの御緣で、德川樣は奧方も御出席といふ事であつたのに前夜から神經痛とか御いたづきで奧樣は御斷りであつた。大谷樣(光瑩)はよく父の所へ御訪問下さつたのを子供心におぼえてゐる、御門跡樣とて、玄關の男達が有りがたかつた若い御美しい御姿だつた。〔中略〕

二階の方へ上り、食堂へついてから、朔郎さんの一順の挨拶もをはり、土方樣は德川、大谷、田中、渡邊、澁澤其他數十名の來賓を代表しての御言葉も賜はり、父母が此度、朔郎の次男、主計を私の家の相續人に定めたといふ披露をなさつた。本家の男の子は四人ある、私方の倍もあるのに、同家の事でもあれば、この人をと私は朔郎さんにたのんで生家へもらつた。こんな安心したことはない。長男の秀雄さんもこの日此處に來て居る。二人とも紅顏の美少年で、黑の五ツ所紋、白半襟がよく引立つ。外貌計りでなくこゝの子達の學業も優れてゐるのである。

私は、私の座の向ふに、早や膝を崩して無邪氣な顏をしてゐる恒方をみて、三宅の本家の行末と、生家の行末の繁榮をおもはずには居られない。而して自分の家の子達の未成品なのを、心

にくりかへしては、成功を念じてゐた。

菊地博士は、京都に御出でゝ、朔郎さんの此間の疏水三十年祝賀會にも御出席になり、朔郎さんが琴の達人であることも御存じ、其の祝賀會の折に曲をつけて自ら歌を作つた民草といふのを、彈け〳〵とせめて居られる。末松さんは裾もホラ〳〵立上り、袴を股立のやうにまくり上げてぢァ彈き給へ〳〵と相撲取りをしてせめられる。如才ない朔郎さんは、彈く〳〵が、今お踊りがはじまるから、それからと逃げられる。紅葉館の美人が二回計り踊る。例のかゝる折の定例、高砂やとうたひあげて、花やかに踊りをはる。お綱は京都へ行つたとか、いつもの上手な尉が見られなかつた。サァ〳〵と忘れずに末松博士は朔郎さんをせめ立てる。誰れか三味線を彈かないか相手をしやうと朔郎さんがいはれるが尻込をして女達は出ぬ。さらばと亂の曲を少し計り彈く。押し手の色音は御得意の事、こんな席でも落つき拂つて、ツーンといふやうに押し手の音が冴えてきこえる、山口、三田、鶴原、吉武、飯島または益田夫人などが男の方がよくもとほめておられる。私は鼻が高い。全體朔郎は何でも器用で、繪もかきます、字は疏水祝賀會の紀念扇で御覽の通り、而して右手の中指はふとした怪我がもとゝなつたかして、化膿して切り取つてしまひ藥指に爪をはめるのです、なぜゝ聞もしない事もさも自分の手柄のやうに吹聽してゐるのを自分で氣が着いて可笑しかつた。宴酣になつて時も漸く立てば人々御歸りになる。先づ一休みと親しい限りが圓座をなして暫時殘つた。

母上は、突然、棚の達磨樣でもお踊りになりませぬかと、父上に仰しやつた。隨分道樂といふ道樂もなさつた方だが、膝を崩した事なし、寐轉んだ事なし、自分御自身は嚴格な方であるけれども、母上がまだ結婚されぬうちに、このお踊りを御覽になつた事があるのださうだ。片山東熊さんは陽氣な御方、笑ひ聲を伺ふ計りでも大體の氣鬱は治りそうな豪傑笑ひをなさる。小父さんお遣んなさい唄ひませうと扇拍子に囃してをられる。私も踊りますぜツンツラツンツラツンツラツン、ホラ、モ一ツをまけにツンツラツンなどと浮かせて御出になる、(中略)眞面目な父上は何處までも眞面目で手拭を御貸しと仰しやる。アラほんとですかと紅葉館の女達は目を見張る。私達はおほつかなげな老體を危ぶみながらあまりの元氣にマアと笑ひ崩れる。

手拭をあはたゞしく取つてあげると、クル〳〵と卷いて腰をヨロ〳〵とお立てになつた。それでもマア轉がしても見たりまで無難に、たゞ立つて、首と手を動かしてドカと御座りになつた。斯ういふ方は生來能のない方なのに八十二歳になつて、何が御出來にならうと思つて居たに反して何處か呼吸がいゝ、ヤツパリお金が掛つた事は違ふといつて親身の人達も感心してしまつた。私の身振を見て先代の菊五郎がほめたよなどゝ甚御得意である、紀伊の國を御唄ひなさる、コンコンチキといふのを、あてこんで金婚式やこんちきやと唄つて、まつ白白の白助稻荷につまゝれて、と頭をクルリと御撫でになつた、こんな才氣は御若い時と違ひ

はない。〔中略〕

當日の引物に、夫婦茶碗といふ事を考へて、父上に詩をかいていたゞき、母上には何十年と書いた事もないからと辭退されるのを、無理に蘭をかいて頂いて、形もあれこれと片山鑑子さんと心配して漸く氣に協つた裏形にした。皆樣によい趣向とほめて頂いて嬉しい。